

## 挑戦力に感動～あえて別会社の人工内耳を選ぶという勇気

UDジャパン内山早苗

まず高岡さまのチャレンジ精神に大いに感動しました。

聴こえとコミュニケーション方法の変遷は、まさに難聴の方たちのコミュニケーションの多様性を表している事実として受け止めました。

それにしても、常にどうしたらより良い方法があるのかと、模索し、実施することの挑戦力に驚きました。

特にびっくりしたことは、左右の人工内耳装具を同じ音のするメーカーではなく、あえて別会社の装具を選ぶという勇気に対してです。4チャンネルで16種類の聴こえを体験できるというむしろ無謀ともいえる方法を実施してしまうチャレンジ精神に乾杯でした！

通常の補聴器でさえ、自分に合わせるのに1年かかる、などというのに。

補聴器と人工内耳での聴こえの違いが、月日を経て同じように聞こえるようになった、とおっしゃっていますが、その間の煩わしさを克服していることに驚きました。

私はかつて、聴こえないということは、何も音がしなくて静かな世界なのかと思っていました。しかし、耳鳴りという大変厄介な存在に悩まされていると聞きました。

松森果林さんは、その耳鳴りを、いまでは時にはモーツァルト、時には演歌、などと楽しんでいると聞き、ほんとにびっくりしたことがあります。

聴覚障がいのある人との交流が始まったのは、17～8年ほど前のことです。

ノーマライゼーション社会の推進を願って、企業で働く障がいのある人の育成を仕事の範囲に含めてからのことです。

新入社員研修から中堅社員、リーダー研修と、障がいのある人も当たり前他の人たちと同様、企業内でステップアップできるように願って研修などを行っています。その中でも、聴覚に障がいのある人たちの課題は大きいです。コミュニケーション障がいと言われるゆえんでもある情報取得の難しさと聴こえの状況への周りの理解不足が、大きな要因です。

特に難聴の方々の生きにくさを感じています。

高岡さまのおっしゃる難聴の聴こえの多様さ、人によっても違うし、自分でもその時の周りの状況や体調によって聞こえが違ってしまふ。この事実をほとん

どの健聴者は知りません。そのため、たまに聞こえが良いときの対応がいつもの状態だと勘違いして、「無視した」「都合の良い内容のときは聴こえるのに、いやなことは聞こえないふりをする」などという誤解から、コミュニケーションギャップが生まれ、評価が下がってしまう、ということは日常のことです。聾のように聞こえないことが明確にわかっていると、周りもそれなりに対応しますが、難聴者への風当たりは強いと感じています。そのため、うつ状態になる難聴者が多いのも事実です。

この状況を改善するには、難聴者の聴こえの状態の周知がまずあります。「難聴者のプロ」としての7項目は、ぜひ、企業で働く難聴者にめざしてほしいと思います。

「周りがわかってくれない」ではなく、いかに自分から周りの理解を得られるように働きかけるか。その能力を持つことが、解決のひとつではないかと思います。もちろん、周囲の理解促進は欠かせない働きかけですが。来週も聴覚障がいが多い研修を実施しますが、この「難聴者のプロ」7項目を高岡さまの活動とともに紹介させていただきます。

障害者権利条約の批准は、大きな味方になると願っています。味方にするように活動したいと思っています。企業内での多様性が価値になるように、これからも仕事や活動を通して働きかけていく所存です。その働きかけ力を私が培うことがまず前提にあります。本日の高岡さまのお話は、私にさらなる意欲を沸かせました。

あらためて、高岡さまの貴重な取り組みと仕事に敬意を表します。

そして、貴重なお話をありがとうございました。

今後ともよろしく願い申し上げます。

2014年11月13日